



自由と友愛の独立聖公会

The Independent Anglican Church of Liberty and Fellowship

自由と友愛の独立聖公会戦後八十年記念声明

平和をつくる者として、歴史と未来のあいだに立つ

序 ——灰の中から生まれた約束

八十年前の夏、この国は焦土の上に立っていました。

都市は焼き尽くされ、家族は引き裂かれ、生活の基盤は崩れ去りました。

広島と長崎の空は、二度と晴れることがないかのように暗く染まり、地上には熱と灰と沈黙が広がりました。あの日、泣き叫ぶ子の名を呼ぶ声、必死に水を探す足音、抱きかかえたまま動かなくなった小さな体の重み——それらは、書物や映像を通して触れるものではなく、現場にいた者の記憶として焼き付いています。

八十年という歳月は、傷口に皮膚をかぶせる時間でもありました。しかし同時に、忘却という別の危険を忍び寄らせる時間でもあります。痛みを知る人が少なくなると、物語は変形され、事実は都合よく切り取られ、過ちは美化される危険があります。

教会は、この流れに抗う使命を負っています。真実を隠さず、痛みを薄めず、しかし恨みにとどまらない言葉を紡ぎ、未来のために語り継ぐ。それが、信仰共同体としての務めです。

一 被爆の証言は「聖なる物語」

広島と長崎で起きたことは、単なる歴史の事件ではありません。

それは、神のかたちに造られた人間が、人間によって破壊されうるという現実の証明でした。

皮膚が焼けただれた人を抱き起こした看護婦の手のぬくもり。

焼け落ちた教会堂の瓦礫の中で、焦げた聖書を胸に祈り続けた信徒の沈黙。

生き延びながらも、何もできなかった悔恨を抱えてきた者の涙。

これらは、統計や数字では測れない「魂の証言」です。

しかし今、証言者の多くは九十歳を超えています。日ごとに声は減り、記憶は「生の言葉」から「記録」に変わりつつあります。

教会は、この証言を「聖なる物語」として守り抜きます。

それは歴史の保存活動ではなく、信仰告白の一部であり、礼拝の中に織り込むべき祈りです。被爆証言は、神のかたちを守るための戒めであり、平和の神学そのものです。

二 自由と友愛——名前に刻まれた召命

わたしたちの教会の名にある「自由」と「友愛」は、単なる理念ではありません。

それは、聖書の物語に根ざした召命です。

自由とは、恐れから解き放たれ、武力や威嚇によらずに共に生きること。

友愛とは、国籍や立場、宗教や文化の違いを越えて、互いをかけがえのない存在として受け入れること。

この精神は、核抑止という論理と正面から衝突します。

恐怖による平和は、砂上の楼閣です。信頼と対話によって築かれる平和だけが、世代を超えて持続します。

福音は、戦場で名もなく倒れた者のためにあり、避難所で孤独に息を引き取った者のためにあり、爆心地から遠く離れた場所でも恐怖に震えた者のためにあります。その福音は、力の均衡ではなく、愛の主権によって世界を支えるものです。

三 加害と被害を共に見つめる勇気

戦争の記憶は、被害の記憶だけではありません。

わたしたちの国は、多くの人々に苦しみと喪失を与えた歴史をもっています。

この事実を脇に置いた平和の語りは、片目を閉じた祈りにすぎません。

十字架のもとに立つとき、加害者も被害者も区別なく、同じ赦しを必要とする者として並び立ちます。真の和解は、この地点からしか始まりません。

この勇気ある直視こそが、平和の基礎をつくれます。

四 核兵器廃絶——預言的使命

核兵器は、単なる軍事技術ではありません。

それは、人間のいのちと尊厳を根こそぎ奪う「罪の構造」の極みです。

使われるか否かにかかわらず、その存在そのものが人類の魂を蝕みます。

わたしたちは、非核三原則の堅持を支持します。しかしそれは出発点にすぎません。

核兵器禁止条約の理念に心から賛同し、国や条約を超えて、世界の教会・市民社会と共に、この兵器を歴史の闇に葬る日を待ち望みます。

聖公会の信仰は、預言者の声を受け継いでいます。「彼らはその剣を打ち直して鋤とし、その槍を打ち直して鎌とする」（イザヤ 2:4）。核兵器廃絶は、まさにこの預言の現代的実践です。

五 忘却に抗う

近年、「昭和レトロ」や戦前の文化を懐かしむ風潮が広がっています。

古い町並みや歌を愛することは美しいことですが、その陰で戦争責任や抑圧の歴史をばかす動きがあるなら、それは危険です。

教会は、忘却に抗います。

過去の痛みを消すのではなく、それを未来を守る知恵として生かします。

若い世代には、戦争を知らないことを恥じる必要はないと告げます。しかし、知らぬままで生きることが許されないと教えます。

六 現代の危機の中で

2025年の世界は、八十年前の惨禍を忘れたかのように、再び緊張と暴力の連鎖に飲み込まれつつあります。

ウクライナや中東では戦火が続き、核兵器使用の脅しが現実の外交手段として口にされています。

核保有国による軍拡、国際協定の形骸化、メディアによる煽動、経済格差による社会不安——これらは、戦争の前夜を思わせる不穏な空気を漂わせています。

この状況下で、教会は「中立」という名の沈黙に逃げることはできません。
キリストの平和は、単なる不戦の状態ではなく、不正と暴力に抗う行動を伴うものです。

七 平和への誓約

戦後八十年の今日、自由と友愛の独立聖公会は、次の誓いを立てます。

証言を守り、祈りの中で伝える。

被爆者や戦争体験者の声を、記録と礼拝の中で保存し、若者が直接触れられる場をつくる。

平和教育と宗教間対話を推進する。

国内外の学校や他宗教との協働により、暴力なき社会の理念を共有する。

核廃絶のための国際的連帯。

世界の聖公会、諸教派、市民団体と共に、祈りと行動で核兵器廃絶を目指す。

加害の歴史を学び、和解の実践を行う。

戦争責任と植民地支配の事実を隠さず学び、具体的な和解の歩みを進める。

結びの祈り

慈しみ深い神よ、

あなたは破壊のただ中からも命を呼び起こされる方。

八十年前、わたしたちは人類の歴史に深い闇を刻みました。

どうか恐れより信頼を、憎しみより友愛を選び取る勇気をお与えください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

この声明は、わたしたちの信仰と良心に基づく預言的証言です。

自由と友愛の独立聖公会は、過去の闇を越えて、平和の福音を掲げ続けます。

未来の世代が、この言葉を読むとき、戦争を「歴史の中の出来事」としてではなく、「二度と繰り返してはならない現実」として覚え続けるように——それが、わたしたちの祈りであり、責務です。

2025 年 8 月 15 日

自由と友愛の独立聖公会

大主教 佐藤俊介



✠「慈しみとまことは出会い

正義と平和は口づけし

まことは地から芽ばえ

正義は天から注がれます。」

(詩 85:11-12)